

兄は塾へ通いつづけ  
たし、はじめた猿楽  
のけいこもさぼるこ  
とはなかった。

突然  
あっけなく  
千蔵が逝った



さわ!!

またおばあさま  
のところに行つて  
もらえるや?

はやく動ける

よし!

なるから  
その間だけ  
こらえてね

母が床につきひとり  
おばあさまのところ  
にむかう兄は、いつ  
も明るく元気に出か  
けてゆく

彦輔…

そのさみしさをかく  
した兄の背中が遠ざ  
かってゆく風景を忘  
れることは、ないだ  
ろう。





そんな兄に、まわりの人たちが、いつも良くしてくれるのが私の心をあたたかくした。



そんなお石みたいな肩長いこと もんじろと筆が持てなくさあせいでいーおげんでおやめよ 彦さん

ハハ

お前は



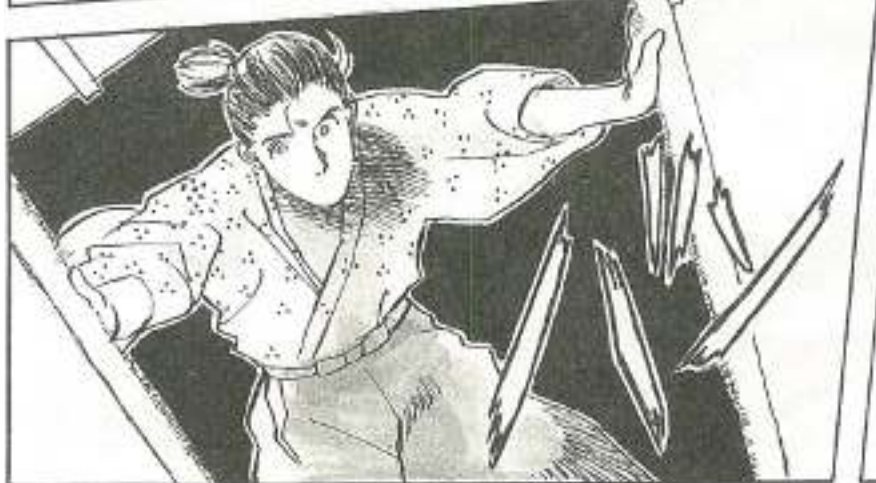
寛延三(一七五〇)年の春。讃岐の各地で凶作がつづき、村の人も、もちろん父も困りはてた。頼恭様がお城の蔵から

三千石余りの米を皆にかしてくださって、なんとか急場を切りぬけた、というありさまだった。

その年の  
五月二十一日



彦輔さんつ  
おさわさんがつ





母が亡くなった。

兄ちゃん！



それからの兄のことだけと...

母の死に顔と、父と兄の涙を見て、私の医者になりたいという希望は、医者になるのだという決意にかわった。

もちろん  
勉学にうち込む兄の姿勢が  
変わることはなかった。

兄は十八歳になるまでの八年  
間、一度も休むことなく、往  
復四里の道を通いつづけたの  
である。



研究によると  
栗山が芝山塾に入った  
のは正しくは十三歳の  
ときらしい。栗山が入  
塾した翌年には芝山は  
江戸・昌平校にかえつ  
ているという。栗山が  
芝山から実際に指導を  
うけたのは、わずか一  
年間——しかし、「天  
人を仰ぐ」ように芝山  
を尊敬していた栗山の  
心は、のこりの七年間、  
毎日江戸と牟礼の間を  
往復していたことだろ  
う。



昌平校

昌平校つて  
あの!!

あ、おちけ  
彦さん!

お江戸のつ  
湯島のつ  
聖堂のお

お江戸で  
学問を  
いいなあ

にじり にじり

その頃の江戸は、大変なに  
ぎわいだった。政の中心も  
京都からしだいに江戸にう  
つり、(長崎の出島をとおし  
て異国の文化も) あらゆる  
ものがこの地に集まりあふ  
れていた。

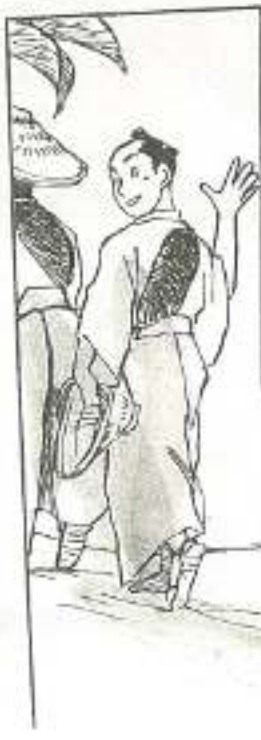
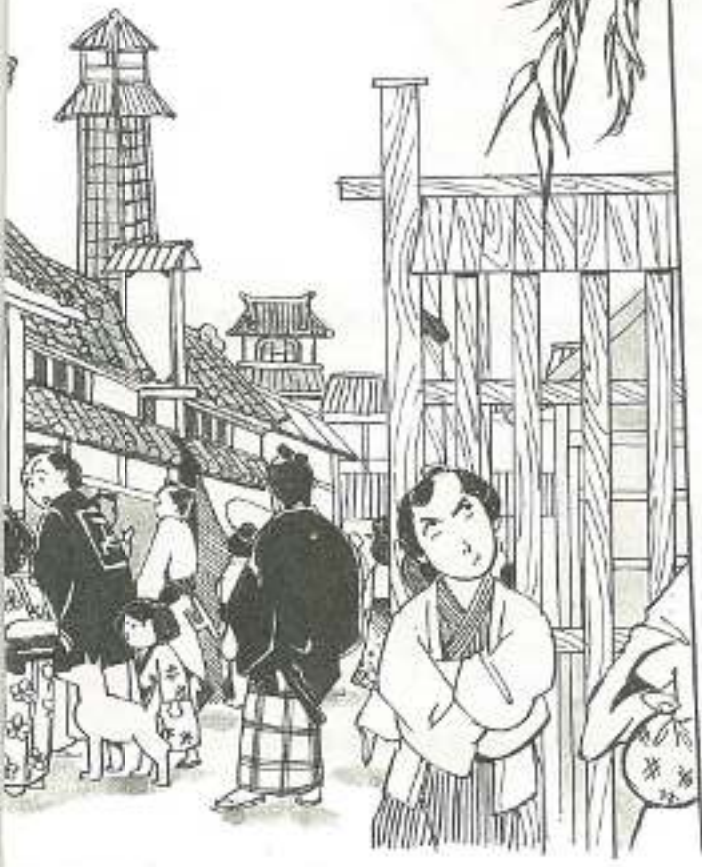


彦さんには  
かなわんつ

はははははは  
はははははは

好きな娘の  
話をしよる  
ような顔を  
するつ

高松藩儒・中村文輔様の  
口入で宝暦二(一七五二)  
年二月に、久保さんが一  
歩先に昌平坂の学問所に入  
った。



食べるもの、芝居や、相撲等の娯楽、書物、絵画ふる屋や髪結い床が皆の情報交換の場となっている。

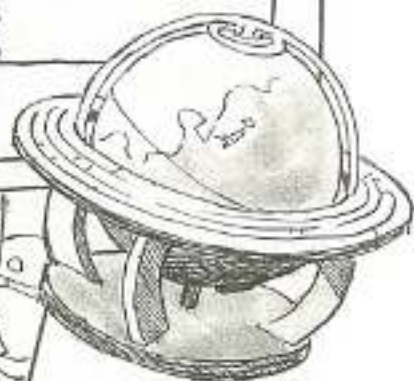


学問についても同じ。子供達に読み書きを教える寺子屋からはじまって儒学、国学、蘭学、医学、数学…いろいろな学問の塾があった。



そして貨幣がすべてのものをはかる物差しのようになっていた。貧しい者は明日の生活に悩み、富める者は法外に財産をたくわえていた。

お金さえあれば、たいいていのは手に入る。知りたい事があれば情報はまわりにあふれている。そこから何を選ぶかは自由だ。その中の何を信じるかも自由だ。



真実も偽りもこっちやませになって氾濫している。

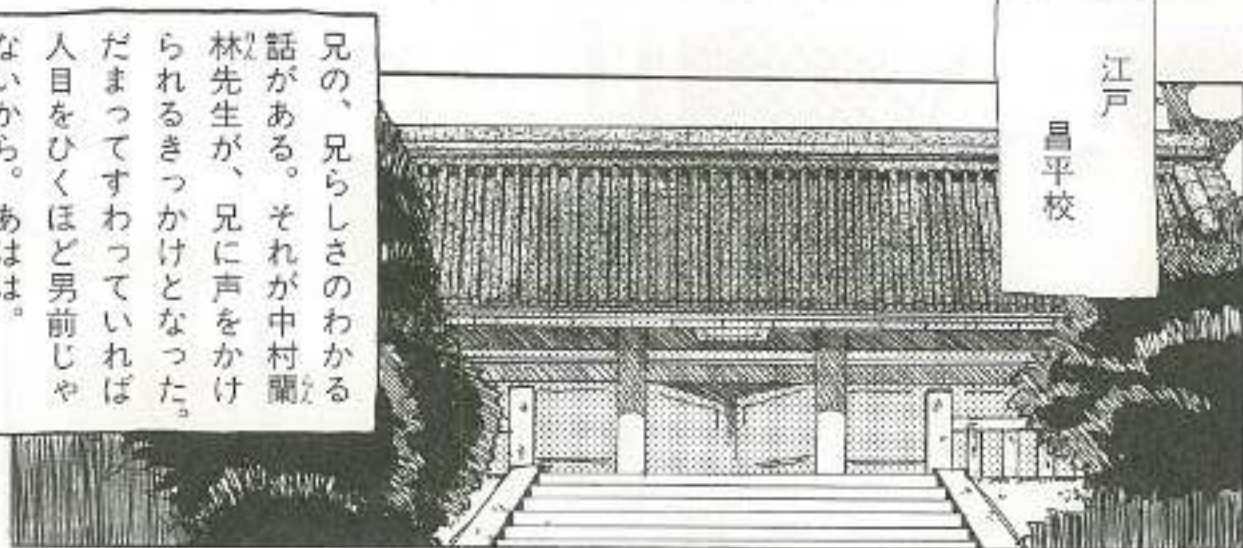
宝暦三（一七五三）年、兄が旅立った江戸の街は、その華かさの裏に、いつも暗い影がおちている。そんな場所だった。——その影にのみ込まれたらおしまいだ。



江戸

昌平校

兄の、兄らしさのわかる話がある。それが中村蘭林先生が、兄に声をかけられるきっかけとなった。だまってすわっていれば人目をひくほど男前じゃないから。あはは。



講義を途中で授ける

日を追って講義に出てくる者がへる。

身につける気がないのかあ



次に

わたしぬけませう

えっ

ぜんぜんわかんせん

私も



む!!

卒業がせまった頃出席しているのは兄だけになった。

ぽんぽん

は??

君、最後まで私の講義を……



柴野邦彦(彦輔)  
ですつ 蘭林先生



はいっ

君…  
名前はっ



ほうっ



あの柴野君は  
いつもやる気満々だ  
— 確か榴岡先生の  
門下でしたね

あいましたっ  
見相の奥  
ごらん  
ごらん

るんるん



いっはん  
ええ  
出来  
すいまん  
ひっ  
あや  
のい

ええ  
何の講義でも  
誰の講義でも  
裏表がまるで  
ない

柴野君といい  
久保君といい芝山  
先生はいい弟子に  
めくまれて幸せ  
ですなあ